

〔特別研究〕

新生児の養育の改善に関する研究

研究班長 副所長 内藤 寿七郎

第I章 母親の育児態度に関する研究

—特にその成立の背景について(序報)—

研究第1部 我妻堯
野末悦子
千賀悠子

<共同研究者> 日本女子大学家政学部児童科研究室

研究目的

個々の母親の育児態度がどのような機序によって発現されるかについて検討した。

昭和45年度研究業績抄録集には、主に面接を通して得た被験者の親子関係のあり方を3群に分けて他の諸変数

について分析した結果を報告した。今回は、親子場面投影テスト(仮称)に対する反応の吟味と、被験者(初産婦)の生育歴との対応を検討し、被験者の子どもに対する態度を吟味した。

研究対象者と方法

昭和45年8月より10月末迄の間に、愛育病院産婦人科にて出産した初産婦のうち、調査票への協力、家庭訪問による面接が可能であった25名を対象とした。

資料収集は、次の方法によった。

(1) 面接、(2) 投影テスト、(3) 被験者の具体的生活環境を知るための調査

(1) 面接

① 被験者の実母より被験者の生育歴を思いだすままに語ってもらい、それを録音する。所要時間30～90分。時期は、被験者の出産以前(1～2か月前)とした。

② ①の録音内容中、被験者の成長に影響を与えたと考えられる部分を中心に10～15分の録音テープに編集し、それを被験者に聴いてもらう。

③ ②の録音テープを刺激として、被験者自身が自分の生育歴をどのように把握しているかを話してもらう。所要

時間30～60分。時期は、出産後(1～2か月)の間とした。

以上の手続を踏み被験者の精神構造がどのように形成されてきたかを把握する。

(2) 投影テスト

子どもに対する態度を把握するものとして、T.A.Tに準じて大人と子どもが登場する場面の写真を作成し投影テストに用いた。

① 親子場面投影テスト作成

投影テスト用として12葉の親子場面の図版を作成した。(以下、親子場面投影テストを図版という)これらは、昭和45年4月～7月にかけて家庭内、繁華街、住宅街等の場所で撮影した170葉の写真の中から、T.A.Tの要素となるべき ④多義性、⑥類似性、③刺激価を備えている16葉を選び、プリテストの結果12葉を図版として用

いた。

② インストラクション

「ここに12枚の写真があります。この写真を御覧になって、ご自分で思った通りのお話を創って下さい。ここにいるのは誰で、どんなことをして、これからどうなるかというようなことです。どんなお話しでもかまいません。ご自由に想像して下さい。」

(8) 被験者の具体的生活環境を知るための調査票

- ①被験者の氏名、生年月日、居住地
- ②被験者の学歴、職業経験の有無及び内容
- ③被験者の結婚年月日、結婚の動機、夫の年令
- ④現在の生活状況（収入、住居形態等）
- ⑤妊娠中に身体的・精神的に困ったこと悩んだことの有無とその内容
- ⑥子どもに対するイメージ
- ⑦被験者の生家の家族構成、居住地等

被験者25名の家族構成、職業等を第1表に示す。

第1表 被験者の環境

No.	氏名	年令	第1子性別	被験者の職業	夫の職業	夫の年令	家族形態	実母の年令
1	C. S	28	♂	自営業の手伝	工機製作業	31	同居者なし	61
2	F. N	29	♀	なし	教員	31	実母、実姉同居	68
3	K. T	25	♂	薬剤師	会社員	30	実母、実弟	49
4	H. O	26	♂	なし	〃	34	同居者なし	66
5	N. T	25	♀	〃	〃	30	夫の父母同居	47
6	K. I	25	♀	〃	青果仲買業	28	〃	56
7	U. O	26	♀	〃	会社員	28	同居者なし	48
8	M. S	25	♀	〃	〃	29	〃	52
9	Y. I	26	♂	〃	音楽家	33	実母同居	58
10	A. T	25	♂	〃	会社員	30	同居者なし	48
11	K. Y	33	♀	舞台俳優	舞台制作	30	〃	57
12	T. Y	24	♂	なし	会社員	28	〃	48
13	I. F	22	♀	〃	花屋勤務員	24	〃	46
14	M. N	29	♀	〃	教員	35	〃	61
15	S. C	23	♀	〃	銀行員→学生	24	実妹同居	45
16	Y. M	28	♂	会社員	会社員	35	同居者なし	57
17	K. S	26	♂	なし	〃	30	〃	61
18	N. A	29	♂	〃	〃	33	〃	55
19	U. Y	29	♀	〃	〃	33	実母、実弟同居	54
20	M. N	26	♀	〃	〃	28	夫の祖母同居	54
21	H. T	27	♂	彫金デザイナー	〃	31	同居者なし	70
22	I. K	26	♂	なし	〃	29	〃	52
23	Y. I	31	♂	〃	印刷業	36	〃	58
24	M. O	28	♀	〃	地方公務員	29	夫の父母同居	50
25	H. S	27	♀	〃	国家公務員	44	〃	50

研究結果と考察

出産後1か月目に行った親子場面投影テストの反応と生育歴との関係

§1. 親子場面の分析方法

標準化されていないT.A.Tの親子場面をどのように分析するかについては以下に述べる。

ハーパー版T.A.Tの反応結果は、反応語数、投影

量、欲求、テーマ、結末、感情調か叙述型かなどを指標として評価されている。T.A.Tの創案以来35年余りの間に、多くの研究者によって研究がなされ、その分析方法は様々であり変化している。M.B. Arnoldは、T.A.Tの story が単に欲求圧力構造の集積ではなくして個人の過去の感覚的印象の創造的所産であるという観点に立ち、被験者にとっての story の意味を分析すること

が必要であるとしている。

われわれは、本研究に用いた親子場面投影テストの分析にあたって、初め、①登場人物がどのような態度で他者に臨んでいるか、②感情調 ③叙述型、④自分を登場人物の誰に置きかえているか、⑤図版に登場していない人物を想像している場合、それは誰か、⑥無視されている登場人物は誰か 等の分析観点について多義性の指数 (Kenny PA=1- $\sum p(i)^2$) を計算し相互の関連性やタイプ別分類を試みたが、事例研究における少数例では満足な結果を得ることはできなかった。

そこで、予め反応をカテゴライズして被験者を一定の枠にはめることをやめ、図版に表現されたものは被験者なりの一つのまとまりを示すものと考えた。全ての被験者に同じように語られている図版はなく極めて変化にとんだ story を得た。図版からは、被験者の親子像の表現をみることを目的であるから、まず図版に表現されたものがあることを要件とした。そこで、第1に表現グループと非表現グループに分けた。表現グループにおいては、親子の関係が安定している場面を描くことのできるものと、描くことのできないものがあることがわかったので、表現グループを2つに分け、それに非表現グループと合計3グループに分類した。被験者は生育歴の親子関係をどのように図版に表現しているか吟味した。

§2. 安定した親子関係を図版に表現しているグループ

(1) 安定した生育歴を図版に表現している事例。

事例1 C.S. (28才)、事例2 F.N. (29才)

事例1, 2によって描かれた母子関係は、母親と子どもの人格が尊重されている。母親は子どもの身体的、精神的発達段階に応じた保護とアドバイスをし、子どもの行動を見守っている場面が描かれている。また、母親は子どもと一緒に遊んだりする場面もある。子どもは、自分の世界の中で自由に伸び伸びとしており、母子の感情の交流が描かれている。自分を図版中の子ども像に投射する、ことはない。

＝生育歴からの吟味＝ 事例1, 2の生育歴の共通点は、幼少時に父親を亡くしている。被験者の母親達は、夫の死後独力で被験者の子ども達を養育してきた。家庭の雰囲気は明るく母子間には対話があった。事例1の母親は、子ども達が青年期に達してからも度々一緒に遊びに出かける。事例2の母親は、被験者の友人達を家庭に招くなどし、若い世代との交流があった。被験者の母親達は経済的には決して、豊かではなかったが、生活に悲壮感がなく、母親達は各々趣味を持ち、精神的な豊かさをそなえた女性であるように考えられる。被験者の母親達

の生き方、生活態度が、被験者にとって「良き母親像」として受けとめられていることが、図版に投影された安定した親子関係像によっても知ることができる。被験者達の面接において「実母の生き方、母親としての態度を全面的に肯定、していることが語られている。

(2) 被験者が生育上体験してきた親子関係が否定的に表現され、また、現在自己の悩む姿が表現されている事例。

事例3 K.T. (25才)

描かれた母親像は、ゆううつな気分であったり、病気であったり悩みを持った母親である。しかし、一方で楽天的で気楽な気分で育児に携わり、自分のしたいことをする母親像が描かれており、母親像に一貫性がない。子ども像には、いつも喜びのある姿が描かれている。母子関係には、子どもと一緒に遊んだり話しをしている母親と子どもの姿が描かれている。家庭像として、夫婦と子どもとの核家族が望まれている。

＝生育歴からの吟味＝ 被験者は、常に緊張した空気につつまれた家庭の中で、特に母親から厳しい躰けを受けた。

被験者は16才の時より家事一切を行なってきた。(母親が職業生活に入ったため) うるおいと談話のある家庭生活ではなかったと被験者自身語っている。母と一緒に過ごす時間を持ちたかったという過去の願望の形の表現が、母と子が一緒になって遊ぶ姿を多く描くことにみられる。悩みのある母親像とその解決法(おじさんに相談すると描かれている)をみると、以下述べる現実の生活の悩みの一端が表現されていると考えられる。被験者は、現在、夫が独断的に諸事一切をとりしきるので、家庭生活の計画が立たず、将来に対して不安を持ち、悩んでいる。被験者は、母親等に相談することなく「年長者」(具体的にどのような人物なのか語らない)に相談している。被験者は、自分の考えや要望があっても、ストレートに自分の気持を表わさず、まず、相手の気持を損ねないように気配りをすることに重点をおいている。常に気持が落ち着かず、心の内が悶々していることが多い。表面では明るい雰囲気を保つよう努めている。このような現在の生活の一端が、一貫性のない母親像に(悩む母親と、楽天的な母親)表現されているのではないだろうか。

被験者は、母親の支配の方向が明確な母子関係の中で育ってきた。(前述の業績集において報告したグループ別の一つに、支配的母子関係の欄参照)、結婚した現在、夫の支配を受け、完全に絶たれていない実母との支配もあり、被験者は自立した精神を持つようとしているが、二

重の支配を受け、悩んでいる現状であった。

(3) 図版の登場人物を批判したり、社会的規範やモデルで他者に臨んでいる事例

事例4 H.O. (26才)、事例5 N.T. (25才)

事例4の母親像は明確ではない。母と子の安定した関係は、子どもから母親への働きかけで描かれている。(母親はこの働きかけに反応していない)。母親は子どもに対して社会的規範で注意するとか躰けるという態度で描かれている。図版をみて描く母親に対し、心配りが足りないとか、子どもに無関心になっていると批判的にみている。

事例5の母親像は、子どもから働きかけられると疲れだと思ったり、そっぽを向き全然気付かない母親として描かれている。時折、おもいつきのように叱ったり注意をする母親の場面がある。

=生育歴と現在の生活からの吟味= 事例4は、「幼少時代実母に面倒をみてもらったが一緒にすごした時などなかった」と語っている。その投影が母親に働きかけていく子ども像に描かれている。母親像としては、躰ける、注意をするという態度で子どもに働きかけている姿がみられるが、被験者の実母は厳しい躰もせず、無抵抗で母親らしさのない表現として被験者には映っているので、厳しさをもった態度をもった母親像を描くことによって、実母への批判を表現しているように考えられる。

被験者は両親が年をとってからの子どもであったので、被験者自身、親に頼らずに早く経済的、精神的に自立しなければならぬと考えていた。常に自信を持って、何事も完全に遂行しなければと思ひ、そのように行動していたと語っている。その性格や態度の断片が、以下述べる描写に表現されているようだ。子どもと母親が互いに働きかけをしているが気持の交流が描かれていない。母親としての役割遂行のみが描かれていることは、被験者自身が母親の役割を果すことに没頭し、気負いだけが先走っている現状をある程度表現しているのではないかと思われる。

事例5の母親の態度には前述でみたように拒絶したい気持が表わされている。被験者は現在の家庭生活にあって夫の両親と同居している。被験者は「よいことはどんどん取り入れ、不合理なことは捨てる」生活をモットーとしているが、家庭生活にあっては、自分の考え方通り物事が運ばず、家族員と折り合いが悪くなることもあり不満を持っている。子どもが、自分の思うどおりにならず、育児(子ども)に対しても不満をもっている。姑との生活、子どもとの生活と、新しい生活場面へのぞんで、万事上手に自分の考え通りに事が運ぶことが

当然であるかのような気持を被験者が持っており、問題の解決にあたって、その原因と解決策を思考することなく、面倒なものは無視する、拒絶してしまう態度にできることが、(子どもを拒絶する態度)図版の描写よりうかがえる。

=事例4、5の生育歴の共通点= 事例4は、実母に対して「母親らしさ」のない人と評価する一方、「自分がそばにいないければ何もできない人であると思うと嬉しくなる」と語り、実母が被験者に頼っている関係がみられる。事例5は、「父親が非常に厳格な人であったが、母が被験者にやさしくしてくれたので母は大切な存在である。母が死んだら自分も死んでしまおうと考えていた」と語っている。現在、精神的に実母を保護している状態にある。事例4、5とも、負けずらいで、常に完全に安定した状態であることをのぞむ点が共通しており、実母に頼られている存在である。親の保護の中には何事もできないと、行動の規範、生き方等を親以外のところに求め、自分の力で一生懸命大人になろうとした面が強くある。事例4、5の子どもに対する態度の描き方に、社会的規範の枠を押しつける姿が強く出ている。母親という役割遂行に多くの注意と関心がそそがれていることがわかる。

(4) 生育歴において依存度が高い生活経験を持ち、現在子どもや実生活が負担な状態を表現している事例
事例6 K.I. (25才)

事例6の母親像は、「元気で明るくテキパキとした働きもののお母さん」、「家事・育児は大変、早く子どもが大きくなって親を手伝ってくれたら」という二つの像が描かれている。家族は夫婦と子どもの核家族を望んでいる。子どもの気持や子どもの体調の変化に気付かず途方にくれている母親も描かれている。子どもが病気をすると夫に頼ってしまう場面や、幼い子どもにも手助けしてほしいと願っている場面がある。

=生育歴からの吟味= 被験者は曾祖母、祖母に育てられ、教育、躰等の決定権は祖母にあった。兄二人は被験者にやさしく学校時代勉強などよく面倒をみてくれた。被験者は、祖母や兄達の保護のもとに不安や困難なことにあわずに成長してきた。「一人で物事を処していくことは出きなかった」と語っている。現在、夫の両親と同居している。生活様式の異なる環境にあって、つつがなく妻として嫁としての仕事がつとまっているのか不安な状態にある。被験者は第1子を帝王切開術によって分娩した。このことについて「とても不安でしかたがなかった。帝王切開で子どもを産むようになり姑に申し訳けなかった」と語っている。図版では、「このお母さん、

大変な思いをして子どもを産んだんでしょね」と描いている場面がある。

周囲から経験を先きどりされるような体験をもって育った被験者は、現在の生活に（特に母親の役割遂行にあたって）適応するよう努力していることが、図版に「明るいテキパキとした働きもものお母さん」と反応していることからわかる。自立心をそなえることなく妻、母親、嫁の三役を果さなければならぬ状態にあり、被験者は自身の中にある依存心を断ちきり何とかしたいとも語っている。図版では、子どもが手に負えなくなる母親の姿があるが、被験者の場合は拒否的態度ではなくして、子どもを充分に受容できるだけの精神的ゆとりを持つことができない状態にあることを表現投影していると考えられる。

(6) 生育歴において、疎通性の少ない親子関係を経験にもったことを図版の親子関係に表現している事例
事例7 U.O. (26才)

子どもへの同一視が多い。描かれている子どもは、図版に登場している大人を無視して一人で行動している。一方、母親に甘えている姿が描かれているかいずれかである。子どもと父親が描かれている場面では、被験者は女性の登場人物を母親としてではなく妻の立場で描く。母親の表現は極めて弱い。育児にあたって当惑している母親が描かれている。例えば、あやしていてもどうあやしていいかわからないとか、夫を頼りにしている様子がある。

=生育歴からの表現=

被験者は放任状態で育ち、親子間の気持の交流は希薄であった。姉妹とも口をきくことも少なかった。母親は夫（父親）との結婚生活は失敗であったと被験者に語っている。家族員の気持は互いに離れていた。被験者は家庭にあって常に一人で読書の世界に親しんでいた。

図版にて親子（母子）関係が希薄であることは、生育歴における被験者のそれを表現しているものと思われる。被験者は、自分の生育歴を省みて親子（母子）間の気持の交流の希薄さを自覚している。しかし、現在の家庭生活においては、母子間の気持の交流が希薄にならないようにとか、家族員同志の気持が離れないように被験者が気配りをしているかは疑問である。信仰の件で、夫とその両親と被験者は異なり、夫が転宗してくれなければ将来離婚するかもしれないと語っている。家庭生活において、特に育児にあたっては夫を頼っていることを図版に表現しているが、信頼する対象として夫が存在しているのか、自分の手に負えないので他者（夫）にまかしているのか定かではない。現在、(出産後1～2か月から8か

月の間)被験者は「神」によってのみ救われると、生活の中心を信仰においている。短時間のうちに信仰心が高かまっていたその理由は明確ではない。

(6) 現在の生活において母親の役割・態度にとまどっている状態を表現している事例

事例8 M.S. (25才)

事例8の母親像は、一生懸命に子どもに働きかけるが子どもには受け入れられず疲れてしまう母親であったり、一方では子どもと母親とがゆったりとくつろいでいる場合の母親である。後者の母親の対象となる子どもはいずれの図版でも乳児ではなく幼児である。「子どもが大きいと家庭が落ち着いてよい」と描いており、被験者は、未来に願望する母親像として後者を描いたものと思える。「子どもと気持の交流があり、豊かで平和な家庭をつくっていきたい。その中でたくましい母親になっていくのだろう」と、被験者の願望が描かれている。一方、「たくましい母親はいやだ」とか「夫とは恋人同志の時が一番楽しく良い時である」と描く。

=生育歴と現在の生活からの表現=

被験者は厳格な躰けを受け、両親の行動規範をそのまま受け入れて成長してきた。親の支配の方向が強いことに批判したり自立心が養い込まれていない自分に疑問を抱くこともなかった。親の考え通りに行動しているのが最善であり安定していると考えている。結婚生活においては、被験者自身が意志と行動の決定をする立場におかれ(支配する側)、困惑している状態が、図版に表現されている母親が育児や家庭生活をこなしていくことに強い不安を持っていることに一部表現されているのではないだろうか。被験者は、「現在、夫との生活は単調であり両親の庇護のもとにいたい」と語っている。

事例6も結婚生活に入って被験者を支配してくれる人を失しない、生活にとまどっているが、何とか努力して新しい生活に適応していこうとしているが、この事例8の場合は、新しい生活に適応していこうという意志よりも、自分を保護してくれるものが欲しいと逃避したい考えがみられる。

(7) 支配的親子関係の中から自立心をもった大人(母親)に成長してきたことを表現している事例

事例9 Y.I. (26才)

事例9の母親像は、「子どもは大人の決めたく子どもの行動規範」に従うべきだ、という考えを持っている。自分を図版中の子ども像に投射することはない。子どもと親(母親)との気持の交流がある。大人(親)と子どもの世界は異なるので各々の分野を守って生活していくことがよいと描いている。他人に依存する場面は描か

れていない。

＝生育歴からの表現＝

被験者は厳しい躰けを受けた。父は戦死。実母は父の栄誉を汚さない人になるように被験者に言いかせたり、行動の枠を定めていた。被験者は実母を扶養しなければならず、大学進学をあきらめ、職業生活に入った。社会に出てからは、実母の厳格な態度に対する苦痛や嫌悪感を取り払われた、と語っている。現在実母の支配からは独立している。図版における母親の態度に、叱ったり注意する場面が再々でてくるが、この描写は、被験者自身が実母から受けた躰等を、大人（親）の子に対する態度と受けとめていることの表現の一つではないだろうか。被験者は「子どもは躰けられるものである」と面接の中で語っている。

◎ 小 括

以上の9事例は、図版に安定した親子関係を表現している。「安定した親子関係」と位置づける諸要因として、図版の描写内容に、①親子間の感情の交流がある

②自分を図版中の子ども像に投射することはない ③大人の立場を保っている ④大人の登場人物を親ばかりではなく大人一般とみなす場面をもつ ⑤父親像は、他の登場人物と気持の交流があり、依存される存在としては表現されない等を多く含んでいることとした。

9事例の被験者達が育ってきた家庭環境で、周囲の大人達（父親、母親、兄弟姉妹）が被験者（子ども）にどのような態度でぞんできたのか、そしてまた、その態度を被験者がどのように受けとめていたのかということが、被験者の子どもに対する考え方・態度に何らかの影響を及ぼしているように考えられる。

被験者達が受けた親の養育態度と被験者自身のその受

けとめ方（現在、被験者の第1子に臨む態度）を第2表に示した。

・Aタイプの事例3とDタイプの事例4、5は、親の養育態度を否定的に受けとめている。事例3は、実母の支配から独立していないが、その支配は不当と考え悩んでいる。図版にて、子どもと一緒に友人のように交じわる母親の姿を描いており、支配的養育態度を否定していると考えられる。事例4、は親を頼れなかったので、行動規範を自分で模索しながら体得し、独立心をもった大人になるよう努力してきた。頼りがいのない親を拒絶することなく、親が被験者に依存している親子関係を結んでいる。被験者の子どもに対する態度には、積極的に初めての経験にぶつかっていく姿勢がある。

・Aタイプの事例9、Cタイプの事例1、2は、親の養育態度を継承していく考えがうかがえる。事例1、2の親子関係は自立した関係にある。被験者は実母を支配者としてではなく人間として尊敬している。被験者の子どもに対する態度には、子どもの人格を尊重し自分が育ってきた家庭環境（家族員が相互に尊重し、あい友愛的雰囲気にある）を継承していく意志がある。事例9は、支配的な養育態度を受けて育ったが、社会人になり実母を扶養し始めてから自立心が確立してきた。被験者は、実母が行なった厳しい躰けは子どもにとって必要なものであると考え、実母の養育態度を継承していく意志を持っている。

・Aタイプの事例6、8・Bタイプの事例7は、育児を目前に控えて困惑した状態にある。事例6は、親、兄弟に依存して（保護のもとに）成長し、自分で行動・意志の決断をつける習慣をもたない。そして、自立心がそなわらないうちに、妻、母親、嫁の役割を果さなければなら

第2表

タイプ	被験者の親の育児態度 (a)		事例番号	被験者は親の育児態度をどのように受けとめているか	
A	支配的養育態度群	親又は家風の支配の方向が明確である	3, K, T 6, K, I 8, M, S 9, Y, I	否定的態度 継承的態度	困惑状態 困惑状態
B	希薄な感情交流群	親子間の感情交流が希薄な関係にある	7, U, O		困惑状態（放棄する態度もある）
C	自立性が成立している群	親が子どもの自主性を尊重し、お互いに自立した人間関係を保っている	1, C, S 2, F, N	継承的態度 継承的態度	
D	互いに依存している群	親子の仲はよいが、お互いの自立性が確立せず、頼り合っている。	4, H, O 5, N, T	否定的態度 否定的態度	

ず、育児のみならず家庭生活の運営に困惑している。事例9も親の支配のもとに素直に育ち、結婚生活において親という舵を失っている。事例7は、親子間の感情の交流が希薄であったので、「親」のあるべき姿（態度）がイメージとして被験者にはわいてこないのではないかと考えられる。現在、家庭・家族のことは眼中にないくらい信仰を大切にしている。（離婚を考えていることや、世紀末の現在、子どもに未来を託することは考えられないと語っている）

§3. 安定した親子関係を図版に表現すること の出来ないグループ

- (1) 母親としての自己を受容できない状態にあることを投影していると考えられる事例（大人一般と子どもとの関係においては安定した関係を投影している事例）
事例10 A.T. (25才)

被験者は、図版の〇〇（女性）の登場人物を母親としてではなく、子どもに対して大人一般とみなす場合においてのみ、子どもと大人との関係に安定した気持の交流がみられる。母親を描写する時には、その母親は子ども以外のことを考え、子どもの行動に注意も関心もない状態にある。被験者は、大人一般を登場させて図版を描く場合、「本来なら実の親子のはずだ」とか「本来なら楽しいのだが、とことわりをする。例えば、図版12を「これは普通だったら何か子どもと一緒に楽しく遊んでいるのだが、親も子ども楽しむ場所だが、このお母さんはイヤな事があってその為子どもを連れてきて何となくボー」と考えている」と描く。

被験者は、経済的に恵まれた環境と、実母の育児に対する細い気配りの中で成長する。親は子どもの教育環境を重視し、その為にも数度引越しをしている。被験者は親のいいつけを守ってきた。親の支配下にあることに安心している。現在、実家の近くに住み、何事も実母の援助を受けている。実母への依存度が高い被験者は、自分自身が母親になり、そしてその役割を行うことを受容できない状態にあるのではないだろうか。生育歴における親子関係の表現をみることは今回は不可能であった。

- (2) 他者に依存したい願望（男性に）が表現されている事例

事例11 K.Y. (33才)

母親像よりも子ども像（自己主張の強い子ども）が多く描かれている。母親が登場する時には同時に父親の登場があり、母親は父親（夫）に援助を求めている。子どもには「善悪の判断」が出来るような厳しい躾けが必要だとしている。子どもの性別は男子を望んでいる。（登場する子どもはすべて男）描かれている子どもは、自分

の気持を大切に、大人が自分（子ども）を理解してくれない時には、大人に対して自己主張を強くする。そして大人（親）との間になんらかの交換条件（お土産等）が成立すると自分の主張をゆづる場面がある。母親は、子どもが少しでも通常の様子と異ると、夫や医者に全面的に頼りきってしまう。

=生育歴からの表現=被験者は一人っ子で父母の愛を一身に受けて成長する。父親を「人間として最高に素晴らしい人であった。父が存命していたなら結婚はしなかったであろう」と語っている。被験者は家庭像として「夫（父親）」を中心にした男の子どものいる明るい雰囲気を描いているが、このことは亡父の姿を自分の家庭生活に再現してみたいという願望を表現しているのではないだろうか。自己主張の強い子ども像は、被験者自身の子ども時代が表現されているようだ。被験者は「善悪」の価値判断に照して納得できないことには相手が誰であろうとも自己の主張を曲げないことが度々あった。

- (3) 母子間の気持の交流が希薄であった生育歴を表現していると考えられる事例

事例12 T.Y. (24才) 事例13 I.F. (22才)

事例12は、母親と子どもの気持が通じ合わないことを終始描く。子どもは母親の関心を得たいが母親は「ソッポを向いたり悲しい顔をしている」。一方母親が子どもに話しかけても気持が通ぜず一方通行である。描かれている人物に力動感がなく弱々しい。

事例13も母親と子どもの気持が通じ合わないことを描く。子ども像は、「大人は身勝手に意地悪で嫌いだ」と大人を攻撃する態度で描かれている。被験者は自分を図版中の子ども像に投射している。子どもの気持を大切にしているが、それに対応する母親の態度は全く描かれていない。

=生育歴と現在の生活からの表現=

事例12は、祖母に育てられ「お祖母ちゃん子」で兄や妹にねたまれていた。実母は妹の世話をよくしていたが被験者は放任されて可愛いがられた記憶はないと語る。兄や妹と口をきくようになったのは被験者が中学生になってからであった。図版では母子の気持の交流が希薄な状態を描いているが、前述の被験者自身の母子関係の一端を表現しているのでないだろうか。又描かれている人物が力動感に乏しい点については、被験者がおとなしい静かな行動を好むこともあるが、特に母親、妻の像では無気力さを示しているのだが、現在の生活で、夫が育児・家庭内の諸事に非協力的で、精神的な援助も感じられず離婚したいと語っていることから、そこに被験者の現状を表現している部分をみる。

事例13は祖母の絶対的支配の下に治められている家庭環境で育つ。実母は家族員としてみなされず「女中」のようだったと語られている(実母、被験者の面接より)。父親は男尊女卑の考えを持ち、家庭生活を省りみるものがなかった。被験者は祖母の愛を一身に受け自由奔放に成長する。被験者は、実母の存在は中学生の頃まで意識中になかったと語っている。高校生になり、我家の家庭の様子が異常であると気づき、両親、祖母を責めたが何の解決も得られず大人不信の根を持つようになったと語る。また、女性を次のようにみている「規則違反するのは女性に多い、女の子の自分は苦労したから男の子がよい女は忍従の生活をしいられるが、時として権威者におさまったりする、等と。女性は大変損な「性」であると考えている。大人、特に女性の大人を嫌いだが、女性であり大人(母親)である自分自身を認めることに抵抗を持っている。常に子どもの立場に立つことにより大人を批判する被験者の気持を代弁しているとおもわれる。被験者は次のように語る「自分は世間によくある大人とはちがって子どもの味方の大人、だと。このように考えることによって、被験者自身大人であり女性であることの内的矛盾からくる葛藤を少なくしているように考えられる。

(4) 子どもの気持を理解されずに育ってきたことを表現している事例

事例14 M.N. (29才)

母親が子どもに働きかける場面は皆無。子どもは母親や大人に働きかけるが彼らから拒否される。拒否された子どもは相手の気持を思いやり、自分から働きかけをやる。拒否したことに反抗する場面はない。描かれる母親は、自分の気持を殺して姑や夫の気持を第一にし犠牲的態度をもっている。一方、子どもや家事を放り出して願望や欲求を満たすことに熱中している姿を描く。

＝生育歴からの表現＝被験者は、家庭内、学校でおとなしい性格の子どもで手のかからない目立たない存在だった。兄弟は5人で被験者は4番目。「兄弟が多いと家庭が落ちつかない」と語る。被験者は親や兄弟から無視されたり拒否された存在ではなかったが、引っ込み思案の被験者の気持(世界)を充分にくみとることが少なかった為、被験者は自分の気持を識ってもらうことよりも先に大人達の気持を思いやるような気配りをする生活態度を身につけたものと考えられる。

(6) 母親像に被験者自身の表現が希薄な事例

事例15 S.C. (23才)

母と子の気持の交流が描かれていない。子どもの心に映る母親は「やっとなんて迎えにきてくれた」「つんと澄して何も答えてくれない」態度を示す。自己犠牲的な母親を

描き「大変だと思う」と述べるだけで被験者自身を投影する母親像は描写されない。

＝生育歴からの表現＝被験者は教育熱心な実母に育てられる。父親は家庭を省りみなかった。被験者は実母に抵抗することなく実母の支配の下にあった。被験者が成長するに従い実母は被験者に夫(父親)が家庭生活を省りみないことによる精神的に不安な状態を打ちあけて被験者を自分の心の支えにしてきた。被験者は実母のぐちの聞き役を務めるが、同情はしていない。実母と被験者との気持の交流が一方通行である。このことは図版に描く母子間にみられる。「夫に対する不満のハケロを子どもの教育に向けたのだから」と実母を評している。「自己犠牲的な母親は大変だ」と描写するのは被験者の実母を図版にみたからであろうと考えられる。被験者は現在、母親、妻という立場だけに不満足であり、学問の世界に入りたい(大学院へ進学したい)と語る、その一面を表現していると考えられることに、被験者は母親像、子ども像に被験者自身を表現することなく、またありたいと願う姿も描写してないことがあげられる。

◎ 小 括

安定した親子関係を投影できない6事例についてみてきた。これら事例の生育歴の共通性として、親が支配的育児態度であったことがあげられる。安定した親子関係を投影したグループにも支配的育児態度の親はみられたが、前者のグループには後者のグループとは異なった特徴をもった生育歴がある。

事例10、11は、親に甘やかされ、そのうえ親は完全に親を頼らせており自立性が育くまれてなかった。事例12は放任状態にあった。事例13は、祖母の絶対的支配のもとで育ち、姑と夫にその存在を全く無視されていた実母をみている。事例14は、多勢の兄弟を持ち家族員に気を使いながら成長してきた。事例15の実母は、いわゆる教育ママで、本人の意志を尊重せずに進学等を決めてきた。一見、実母は被験者にとって支配者のようであるが、常に何かに脅え不安な状態にあり、被験者に頼っている。被験者にとっては不安定な頼りのない実母であった。

§4. 図版の描写が記述的なグループ

(1) 長い沈黙を交えながら叙述した事例

事例16 Y.M. (28才)

事例16は、図版に反応するまでの時間が最高95秒、平均25秒かかっている。(一言も、話さない)途中何度も沈黙が挿入する。登場人物には感情の表現がない。

(2) 図版反応という課題解決をできるだけソツなく遂行しようとした事例

事例17 K.S. (26才) 事例18 N.A. (29才)

事例17、18は、^①しつける、^②教える、^③言いきかせる、と母親の態度が支配的に描写されているが、与えられた課題に自分の感情を挿入しないように気配りしながら図版の説明をしている。生育歴をみると、被験者達は、親が支配的育児態度を持ち、その支配の下で「優等生」として成長してきている。自分の悩みや弱さを外に出すことはなく、常に平静な心を持ち、「良い子」「賢い子」として自分を位置づけていたことを識る。

(3) 課題解決がやや負担な事例

事例19 U.Y. (29才)

被験者は図版に対して「こういうことは苦手だ、想像力がないから」と度々語る。母親と子どもを登場させる場面があるが母と子の間には気持の交流はない。母親が子どもを無視している場面がある。

(4) 図版を批判的に説明している事例

事例20 M.N. (26才) 事例21 H.T. (27才)

事例20、21は、登場人物の態度や、環境を批判する、「子どもが生まれると母親はだらしくなると言われていることを、これを見て感じる」、「こんな場所に子どもを連れてくるのはかわいそう、連れてこなければいい」、「遊園地はよく考えて作らなければいけない、こんな遊園地は子どもがかわいそう」等と描写する。事例は、図版の描写をするのに必らず笑いの反応を示す。図版をみての感嘆や共感等の種のもではなかった。課題解決からの逃避のようにおまわれる。

(5) 図版への反応に自己の経験を介入していない事例

事例22 I.K. (26才) 事例23 Y.I. (31才)

事例24 M.O. (28才) 事例25 H.S. (27才)

4事例ともおだやかな状態の親子関係を説明的に描写している。4事例の生育歴をみると、経済的に裕福ではなかったが、両親がお互いに助け合い信頼しあって生活

を営んできたことと被験者達は受けとめている。家族員相互間におだやかな気持の交流があったことがわかる。

§5. 出産後1カ月目に行なったT. A. T 様式親子場面図版反応のまとめ

初産婦25名に実施した図版投影テストによって多くの反応結果が得られた。被験者達の子どもに対する態度は様々な様相を示している。

われわれは、「各世代の女性の子どもに対する認知、感情等」について調査したところによると(注1)、被験者の属する世代においては、子どもに対して穏和な気持とイメージを持っていることを識った。だが今回の投影テストの結果をみると、前述のごとく子どもを拒否する母親等があったり各人各様である。

被験者の子どもに対する態度は、それを形成する要因等が複雑にからみあっていることから、被験者間の子どもに対する態度の差違が生じる原因を一所に求めることは不可能である。

子ども時代に、大人(親、兄弟等に)がどのような態度で育児したか、接してきたか、そして子どもは、その大人の態度をどのように受けとめて成長してきたかという大人(親)と子どもの関係が、次の世代の育児を担う時の母親の態度に影響を及ぼしていると考えられる。

子どもの自主性が重じられ、子どもの自立を助けるような親の育児態度の中で育った被験者は、出産1カ月後新しい生命(子ども)を前にして自分の行動に困惑したりすることなく安定した気持でいたと思われる。

親が支配的であったり、親子間の気持の交流が希薄であった被験者は、子どもと安定した気持で親子関係を結ぶことに困難さがあることを示している。親のいいつけ通りに親の考え方を素直に受容して育ってきた被験者には自立性に欠けており、子どもとの間に安定を欠いた親子関係の状態を示している。

お わ り に

母親の育児態度がどのような機序によって発現されるかについて、その母親の生育歴を追い、その中における親子関係に焦点をあて、第一子との親子関係にどのような影響をもっているのか否かをみてきた。一個人の育児態度は、多くの factor によって構成され、作用しあって変化していくものである。今回の研究は、あくまでも、被験者の生育歴における親子関係が、どのような内容であり、被験者自身どのように受けとめているのか、そして第一子にのぞむ母親の役割・態度にどのように発現されているのか否かをみることに主眼をおいたのであ

る。

写真版をその価値を半減させることなく掲載しなければ意味ないので本報告でのプリントは割愛した。

また、被験者とその母の録音テープ内容の紹介、生育歴、写真版反応描写を全部報告するには紙面に余裕がないのでこれもまた割愛した。

本研究をすすめるにあたり日本女子大学古沢頼雄先生のご指導をいただきました。厚くお礼申し上げます。T. A. T 様式親子場面作成には、サンケイ新聞社出版局写真部の石井敏雄氏のお世話になりました。調査実施に

ご協力下さいました方々にお礼申し上げます。

(注)「女性の生き方について、女性自身の認知と感情と題して、現在の各世代の女性達が生きていくうえで遭遇すると考えられる諸々の問題を、いかに把え、いかに感じているかを、18~49才の世代にわたって250名に質問紙を作成し、回答してもらった。その調査の結果の一部をここに報告する。調査の概要は以下の通りである。認知的面については、`出産、`育児、`職業、`家庭、`結婚、`子ども、`親の6つの観点から103項目の調査票を作成した。感情的面については、C. E. Osgoodによって1952年に提案されたSD法により、前述の6つの観点の内包的意味としての Affective Meaning を把えることとした。6つの観点に共通して使える形容詞群であること、ばらつきをもって回答されることを考慮して27対の形容詞群を選んだ。

〔文 献〕

1) Helene Deutsch (懸田克躬、原百代訳)：母親の

心理 I、II、III、日本教文社、昭39
 2) 土居 健郎：精神療法の臨床と指導、医学書院、1967。
 3) 土居 健郎：精神療法と精神分析、金子書房、昭36。
 4) 波多野完治監修：コミュニケーションの心理学、誠信書房、昭39。
 5) 服部正：女性の心理学、朝倉書店、昭46。
 6) M. J. Rosenberg：A structural theory of attitude Dynamics, Public Opinion Quarterly
 7) L. M. Stoly：Influences on Parent Behavior, Stanford Univ. 1967。
 8) R. A. Spitz (古賀行義訳)：ノー・アンド・イネス—母子通じあいの発生—、同文書院、昭43。
 9) R. A. Spitz (古賀行義訳)：母子関係の成り立ち、同文書院、昭40。
 10) 木村駿：T A T 診断法入門、誠信書房、昭39

Researches for the Improvement of rearing New-born Infants

Jushichiroo Naitoo et al.

Chapter I Study on Upbringing Attitudes of Mothers

Dept. 1 Takashi Wagatsuma
Etsuko Nozue
Yuuko Chiga

Kozawa et al.
(Nippon Women's University)
(Dept. of Home Economics)

Purpose: In our previous study we investigated by what mechanism each mother's upbringing attitude had been revealed. In this report we aimed at analyzing the relation between the early life history of a primipara and her upbringing attitude towards her first child. Especially, we studied on how the mother-child relationship in the early life history of the studied subject influenced and had connection with the present relation to her first child.

Subjects: We chose 25 primiparae who understood the purport of our study and who could answer our questions in several interviews with us from among the primiparae who had given birth to babies during the period from August to the end of October in 1970 at Obstetric & Gynaecological Dept. of Aiiiku Hospital.

Method: Adopted the following 3 methods to collect materials; (1) interview (with each of the subjects and with her real mother), (2) projective test, and (3) investigation sheet (to inquire the subject's living environment, etc.)

Findings: We examined the relation between the result of the projective test (test by photographs like TAT) and the subject's early life history. The projective test was given twice, one month after the subject was delivered of a baby and eight months after. In examining the above-stated relation, we paid attention to whether the subject's mother-child relationship was projected in the reactions to the photographs. As the result of the examination, we divided the reactions into the following 3 groups; Group 1-the mother-child relationship is projected, and it is described as a stable situation. Group 2-although the relationship is projected, it is not described as a stable situation. Group 3-the mother-child relationship is not projected at all. It was found that the result of each subject's reactions to the photographs were varied and the subject's attitude towards her child was diversified. We cannot mention the characteristic of the subject's history in these groups nor can we classify the subjects into some sorts of patterns. It is because the difference in the attitude towards the child stems from the fact that various factors are intricately tied up. It is difficult to take out a single factor and discuss its cause and effect. So far as we have studied, we have found that the way how the subject was treated in her childhood by grown-ups (parents, brothers, sisters) and the way how the subject herself accepted the attitudes of those grown-ups towards her have deep effects upon the attitude towards the subject's child when she found herself in the position of a grown-up (a mother).